



B E T H E L 通 信

2024年10月号 (第255号)

松山ベテル病院 松山市祝谷6丁目1229番地 TEL089-925-5000
ホームページ <https://www.bethel.or.jp/>



カマキリと過ごした夏 ～感動をありがとう！！～

秋を身近に感じ過ごしやすくなりました。



今年の夏は、暑かったですね。早くから暑い時期が長かった様に思います。その分、保育園では連日泥んこ遊び、プール遊びなどを思う存分満喫する事ができました。子ども達は顔や頭に泥が付いてもズンズンと泥の中に入って行きます。保育士も予想出来ない姿になりましたが、楽しんでくれました。プールが始まっても泥んこ遊びは続き、それと同時に昆虫探しも始まりました。スコップ片手にプランター、畑、向日葵の葉と巡ります。7月下旬、向日葵の葉に、6cm程のカマキリを発見！！不思議な動きに子どもも保育士も全神経を集中して観ているとカマキリも動かず、お互いがにらめっこでした。子ども達も興味津々だったので、飼うことにしました。

数日後、白く透明な物があり、「これは何？」と考え、脱皮と気付いた時は驚きました。それからカマキリ愛は強くなり、ワクワクが高まり、飼育方法、エサは？調べてすぐ行動です。エサは、生きている虫を食べると知り、保育士は無言になりましたが、バッタの捕獲に奮闘しました。カマキリは日を重ねるごとに、身体がしっかりして、あまり動かない日も尾は厚さを増してきました。子ども達はカマキリが前足を伸ばしバッタを持ち、食べ始める光景を見て固まっていました。捕食する事で自分の命を保ち、次の命へと繋げていく生命の大切さ・尊さを心で感じた瞬間でした。8月には2回目の脱皮がありみんなで感動を共有しました。カマキリの顔や尾は一層立派になり、羽を広げると美しく迫力満点です。ちなみにカマキリはメスだと思います。

保育園は園内で色々な虫に出会えます。これからも園の環境を大切にしながら子ども達と自然に触れ、素敵な出会いができればと思っています。





毎日必死です

人類の薬剤使用の歴史は、19世紀まで、漢方薬を代表とする生薬が主流でした。20世紀に入り生薬や生態から有効成分を抽出し薬剤化する技術が発展し、さらに21世紀には科学的進歩が加速し、人工化合物を用いた薬剤が誕生しました。その後、抗体を利用した薬剤が生まれ、コロナ禍では mRNA ワクチンという革新的な拡散医薬品が開発されました。実験室レベルでは、CRISPR-Cas9 というツールを用いて DNA を編集する技術も進展し、医療現場にも遺伝子操作技術が登場し、遺伝性疾患の治療が現実味を帯びています。

現代の医療現場では、新薬を適切に使用するために、科学的根拠に基づく医療（エビデンス・ベースド・メディシン）がますます求められ、医療従事者は必死に学び続けています。私も医師として患者さまに疾患を分かりやすく説明し、インフォームド・コンセントを得るよう心がけてきました。しかし、常にどこかにモヤモヤした感覚が残っていました。自分の勉強不足かと思い、論文を読んだり、説明の仕方を工夫してみたりしましたが、丁寧に説明すればするほど、患者さまから「じゃあ、それで良いです」と返事が返ってくるだけで、その感覚は深まるばかりでした。

松山ベテル病院で働き始めて1年が経つ頃、ようやく少しずつ仕事に慣れ、患者さまとリラックスして接する余裕が生まれました。その中で気づいたのは、治療についての話よりも、他愛もない会話や車椅子を押して一緒に散歩をした時の方が、患者さまから笑顔や感謝の言葉をいただけるということでした。ある日、患者さまから「前の病院では、声を出すことがほとんどなかった。ベテル病院に来てから、たくさんお話ができて嬉しい。」と言われ、また別の患者さまのご家族からも「入院している父のことを聞いてくれて、それだけで嬉しかった。」と言われました。

その時、私はようやく気づきました。エビデンスに基づく医療は確かに『疾患』に対して最善の治療を提供するものですが、私たち医師が向き合うべきは『患者さま』であると。患者さまの背景や価値観に基づいた治療の選択を、一緒に考えていくことこそが本来の医療ではないかと考え始めました。このような考え方は、最近では「ナラティブ・ベースド・メディシン」と呼ばれています。

エビデンス・ベースド・メディシンとナラティブ・ベースド・メディシンは、対立する概念ではなく、むしろ融合するべきものです。世代ごとの価値観や物語を尊重しながら、科学的根拠に基づいた知識を活用することで、より患者さま中心の温かい医療が提供できるはずです。『お医者さんの言うことは絶対』という医療から、エビデンスと患者さま一人ひとりの物語の両方を尊重する、包括的なアプローチが求められる医療へと変化し始めています。言葉にするのは簡単ですが、患者さまの物語を一人の医師がすべて担うのは難しいため、チーム医療で対応する必要があります。

こうした考察の中で、毎日ホスピス病棟で何気なく行われているカンファレンスが、まさにナラティブ・ベースド・メディシンであると改めて気づかされた今日この頃です。自分はまだまだだと改めて思い知らされ、もっと精進せねばとこっそりと誓っていました。



癒しの時間

3年前のある日、コロナ禍で外出もままならない中「Instagram」である音色を耳にしました。オルゴールのような透明感のある、それでいて奥行きのある音色に聞き入ってしまいました。その音色の正体は「カリンバ」という楽器でした。アフリカの民族楽器で、細い金属を親指で弾いて音を出すというもので「ハンドオルゴール」とも呼ばれているものです。

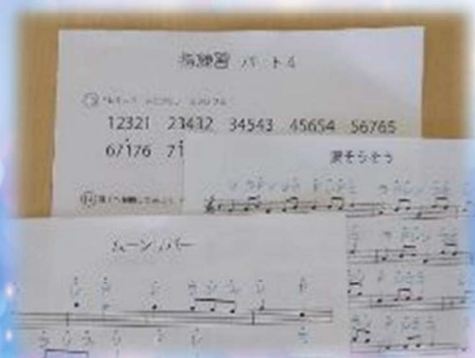
色々調べているうちにだんだんと「弾いてみたい」と思い、すぐさまカリンバを教えてくれる音楽教室を探しました。しかし全く見つかりませんでした。それでも無性にカリンバが欲しくなり、それまで楽器店など全く縁のない生活でしたが勢いのまま購入しました。購入したのはいいものの、残念ながらそれから暫く音楽教室が見当たらず、悶々とした日々を過ごしていました。そしてカリンバもいつしか押し入れの片隅に追いやられそうになったある日、新聞記事で「カリンバ教室」を見つけ、思い切って申し込みました。音楽を習うのは幼稚園の頃、オルガン教室以来で半世紀ぶりの体験となりました。

教室は、毎回ドキドキの連続ですが、奇しくも参加者は同世代ばかりで自然と打ち解け、和気あいあいと有意義な時間を過ごしています。細い金属の棒を親指で弾くのですが、慣れない頃は親指に力が入りすぎて音の強弱にムラが出来たり、右手と左手と同時に弾くタイミングが上手くできず音が重なったりと悪戦苦闘の連続でした。現在も手が思う様に動かず音がとんだり、まだまだ課題は尽きません。レッスン曲は現在のヒット曲、童謡、CMソングなど聴き慣れた曲なので自分で弾きながら心地良さを味わいながら楽しんでいます。

慣れてくると自分自身でアレンジ演奏が出来るとのことですが、今の私のレベルでは、まだまだ先になりそうです。あまり馴染みのない楽器ですが、近年愛好者も増加しているとのこと。持ち運びもできて値段も手頃なのも理由の一つだと思います。

教室に通い始めて数か月ですが、レッスンの1時間半の空間は私にとっては癒しの時間となっています。音楽がある生活をこれからも楽しんでいきたいと思っています。

これを機会に少しでもこの楽器に興味を持っていただければ幸いです。



※音階が分かりやすいようにシール貼って使用しています。

外来診療日のお知らせ

◎豊田 泰孝 医師（精神科・心療内科）

10月2日（水）、10月16日（水）、10月30日（水）

◎10月の休診（9月24日現在）

10月 2日（水）、10月9日（水）松井 貴司 医師（内科）

10月10日（木）越智 拓良 医師（内科）



松山ベテル病院では、接遇目標・医療安全推進目標をかかげています

10月 接遇目標

二〇二四年 十月の接遇目標

信頼関係を築くために
適切な言葉と表現で
コミュニケーションを
取りましょう

聖愛会 接遇委員会

接遇委員会

9・10月 医療安全推進目標

多職種と築く(気付く)安全

安心の輪(和)!



医療安全委員会

ベテルガーデン (4階)



ベテル旬会
いつしかに

日の過ぎにけり

鯛雲

(河田 和子)



- ・投句箱を外来・各病棟に設置しています。皆様のご投句をお待ちしております。
- ・『ベテル通信』について、ご意見やご要望を「ご意見箱」へお寄せください。
- ・掲載中の写真についてはご本人、ご家族の許可を得ています。

発行日 2024年9月24日